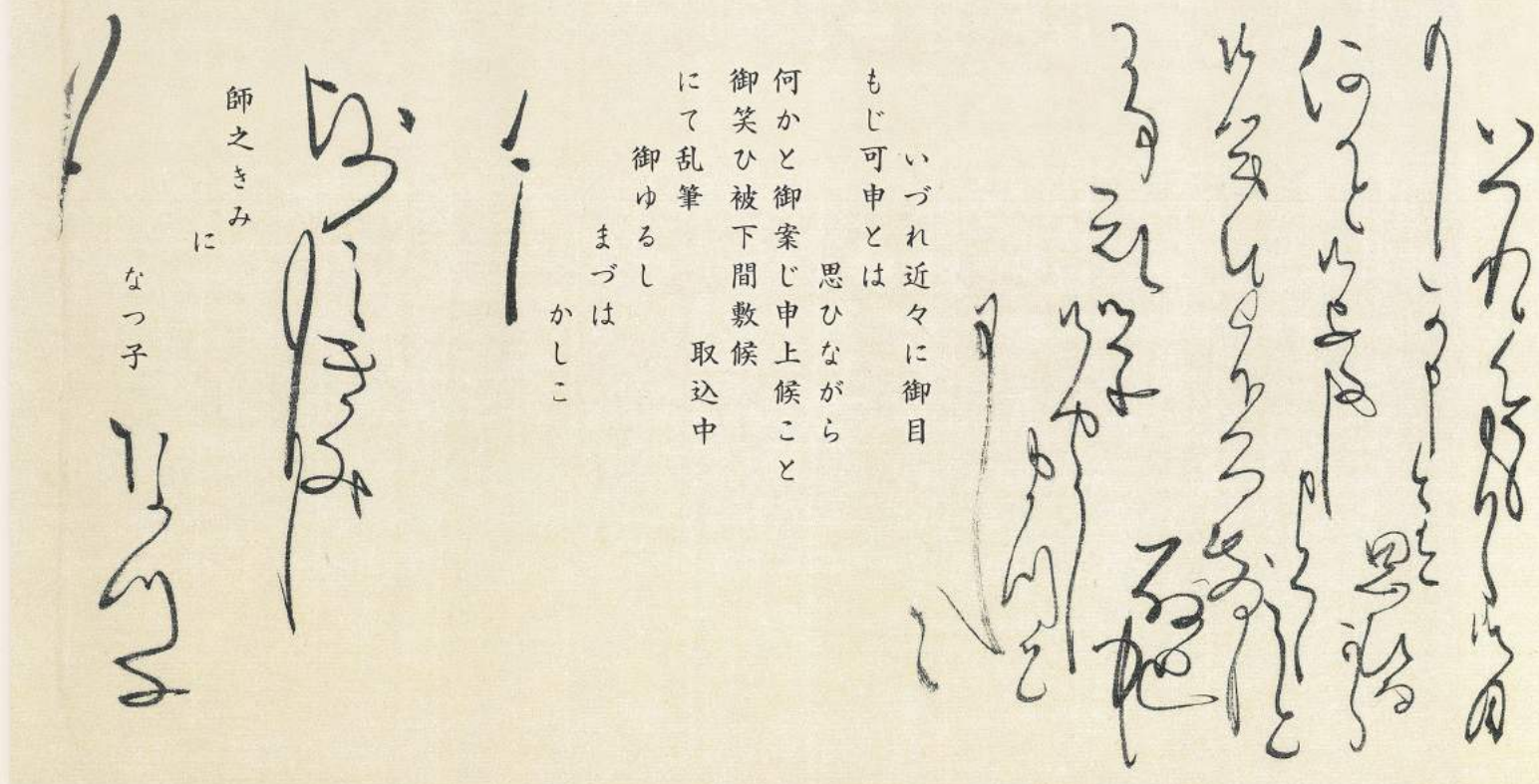




樋口一葉筆 半井桃水宛書簡・部分(明治25年6月)

特別展

一葉と手紙

令和4年

10月22日[土]～12月11日[日]

開館時間 9:00～16:30(入館は16:00まで)

休館日 毎週月曜日(祝休日の場合は翌平日)

※展示替えのため10月17日(月)～21日(金)、12月12日(月)～16日(金)は
休館いたします

※ご来館の前にホームページ等で最新情報をご確認ください

入場料 一般 300円(200円)、小中高生 100円(50円)

※()内は20名以上の団体料金

※障害者手帳、療育手帳、精神障害者福祉手帳、特定疾患医療受給者証を
お持ちの方とその介護者の方は無料

主催 公益財団法人 台東区芸術文化財団

台東区立 一葉記念館

〒110-0012 東京都台東区竜泉3-18-4 Tel.03-3873-0004

東京メトロ日比谷線三ノ輪駅徒歩約10分

<https://www.taitocity.net/zaidan/ichiyo/>



ちいとう文化財団

猫の子をもらひにやる文
今日學校にて伺ひしに御手飼の三毛あまた子を産み候よし勝れて容
貌よき赤猫は御相續と仰せられたれば夫れは願ひも中上まじ悉く白
うて尾と頭とに少し黒き處ある男猫の候とや私寵愛の玉をば隣の
犬に噛まれしより以來あれに似かよひた
しに候まゝ御話し承りしより其猫の
も御遣はし相成るべきやう仰せら
が頂戴ねがひに出し候かならず
し申べく旨き物たべさせて光澤
く候前に申した隣の犬は早くに行か
御座候まゝ何とぞ御ゆるし下され度御
袋親猫たべ料にと進み参らせ候御願ひまで
かしこ

(樋口一葉『通俗書簡文』より)



特別展

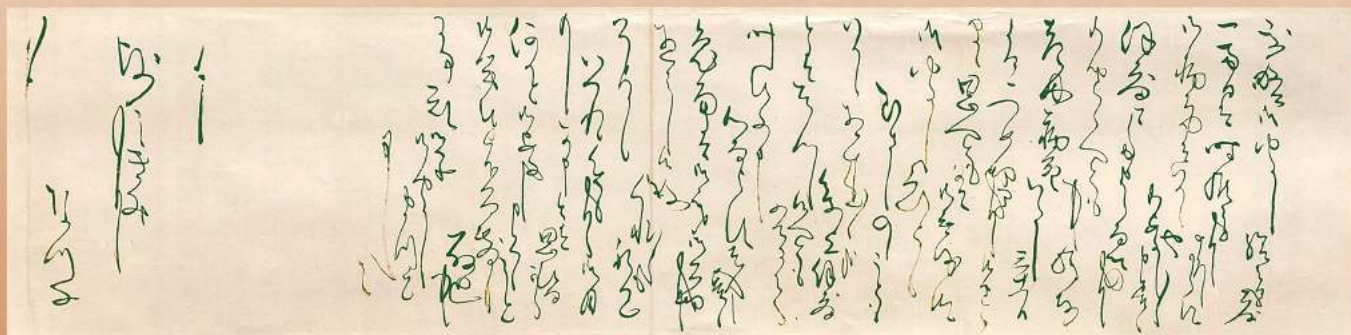
一葉と手紙

明治時代、とくに電話が普及する以前には、手紙はほとんど唯一の通信手段でした。当時は、近々の予定の変更などちょっとした通知のために現代のメール感覚で葉書を送り、また一方で、思いの丈を巻紙に連綿としたためた長文の封書を書きました。文字が書くものではなく打つものとなりつつある今、あらためて紙に筆で文字を書いて諸々を伝達した〈手紙〉を目にすると、明治を生きた人びとの声が聞こえてくるようです。

今年、樋口一葉は生誕150年を迎え、春にはその記念の特別展「一葉の真筆」を開催しました。本展では、とくに〈手紙〉に焦点をあて、春の真筆展で展示しきれなかった一葉の手紙を中心に、田邊花圃、伊東夏子、田中みの子、半井桃水、馬場孤蝶など交流のあった人びとの自筆書簡をご覧ください。また一葉の著作中、唯一生前に単行本として刊行された手紙の例文集『通俗書簡文』もあわせて紹介いたします。

*マスクの着用、検温など感染症対策にご協力をお願いいたします

*ご来館の前にホームページをご確認ください



樋口一葉筆 半井桃水宛書簡(明治25年6月)

当時、肛門炎を患い療養していた小説の師半井桃水を案じて書かれた。一葉が書いた小説「五月雨」が載る『武蔵野』第三編の発行の行方にも触れている



伊東夏子筆 樋口一葉宛葉書
(明治20年9月9日)

萩の舎の師中島歌子が一葉のもとに休講を知らせる葉書を書いたが、番地を書き忘れたため、伊東夏子があらためて知らせた



三宅花圃筆 樋口一葉宛書簡
(明治27年5月7日)

この日、上野公園内の料亭桜雲台で三宅花圃(旧姓田邊)の歌門披露の歌会が開かれたが、会場に一葉の姿が見えないことから書かれたもの



『日用百科全書 第十二編 通俗書簡文』
(明治29年5月 博文館)

生前に刊行された唯一の単行本で数十版を重ねるベストセラーとなった。季節ごとの手紙のほか「猫の子をもらいにやる文」や「人の家の盆栽を子のそこのひつるに」など当時の暮らしが目に浮かぶような例文が並ぶ



令和4年度 一葉祭

令和4年11月23日(水・祝) 入館無料

樋口一葉の命日に開催している一葉祭。

一葉を偲ぶ記念講演と朗読(要事前申込・抽選)をお楽しみいただけます。

記念講演: 関礼子氏(元中央大学文学部教授)

朗 読: 熊澤南水氏(朗読家)

*詳しくはホームページ等をご覧ください。

